審 査 結 果 の 要 旨

氏 名　金出 ミチル

本論文は、歴史的建造物を現代的な条件の中で使い続けるための修復手法を探るものである。対象を、近年積極的に活用が進められるようになっている近代に建てられた洋風建築に定め、「修理技術者」たちによる保存修理を受けた国指定重要文化財に焦点を当てている。既存の建物を使い続けることは、文化財保存の観点からだけでなく環境保護の面からも、また修復再生された建物が地域活性化に及ぼしうる効果からも重視されており、ここには広い方面に影響を及ぼす含みがある。

国による近代建築保存修復への本格的な取り組みは 1960 年代中期からであり、社寺建築など他の建物種別と比較するとその保存の歴史は短い。近代建築には公共的用途を与えられたものが多く、歴史的建造物に対する社会的関心が高まるなか、建物の来歴や特質を伝えることのできる修復のあり方が問われるようになっている。

従来、社寺建築の保存については、建築歴史の一節として様々な文献で触れられてきているが、近代建築修復の経緯やこれらの詳細が明らかにされることは、ごく稀であった。個別の事例として修復が行われた時期に専門誌で取り扱われることは見られたが、全国各地の近代建築修復の全容を、その社会的背景から修復内容の詳細及び修復後の活用にわたって検証したものはなかった。

本研究は、具体的な修復事例を通して今までの近代洋風建築修復の成り立ちを顧みながら、その全体の姿を明らかにし、今後行われる近代建築修復のあり方の探究を目的としている。本研究の構成の概要は以下の通りである。

第1章では、本研究の背景となる近代建築保護の歴史と近年急速に変化しつつある歴史的建造物を取り巻く社会的環境を扱っている。特に、従来保存の対象とならなかった近代化遺産や現代建築の保存も視野に入れ、これらを残すための方策が必要とされていることを説明した。次いで、歴史的建造物の保存修復が注目され、実際に修復に関わる人たちが増えてきている状況を考察し、私企業独自の努力による建築再生や文化庁以外の各省庁における保存関連の動きを取り上げた。

第2章では、現場で行われる修復の詳細を、初期の保存修理・移築された建物及び野外建築博物館・修復に伴う調査と復原技法の発展・耐震対策の変遷・室内調度品の復原の項目について

考察した。特に、近代建築特有の建築材料については、具体的な調査方法及び修復技法の変遷を実証的に示し、科学技術の導入や経験の蓄積による発展に注目している。また、対象となる建物の構造別に近代建築修復の特徴を見出している。

第3章では、近代建築を活用することに焦点を当て、修復時の活用計画の重要性を確認するとともに、活用に関連する様々な条件への対応方法について分析した。特にこの項には、歴史的建造物が所在する現地における情報収集の成果が取り入れられている。

最後の結びで、本研究全体を通して近代洋風建築修復は、重要文化財の保存修理を基礎として発展してきたことが明らかにされたが、地域の文化財に対して柔軟なかたちで行われている修復にも学ぶべきことが多く含まれること、さらに将来的には歴史的建造物の修復に、より多くの人たちが関わることができるような社会体制が必要とされていることが再確認された。

本研究は、対象とする建物自体の調査を主とした調査方法により修復時の状況に加えて修復後の建物の現況を把握し、これらの活用状況も捉えている。同時に修復の記録として作成される保存修理工事報告書を主体とする関連資料から修復の技術及び考え方に関する情報を得て、現実に即した今日的な近代建築の修復のあり方を考察している。近代洋風建築修復の経緯の全体像を明らかにしながら、これを取り巻く社会的背景にも目を向けており、近代建築修復の方向性を多様な方面から分析している。

当初は特殊な修復対象として捉えられた近代建築の過去 40 年間にわたる修復事例の検証により、修復技術の発展や復原に関する考え方の変遷を読み取る試みがなされた。このことにより、本研究は今後の近代建築修復において参照することができ、これからの修復に影響を及ぼしうる内容となっている。建物の歴史を伝える近代建築修復のための環境を整えてゆくための方向性を示した研究業績として価値が高い。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。